

# 英語多読用図書としての原書児童書の活用：使用語彙のコーパス分析

## Using Authentic Children's Books for Extensive English Reading: A Corpus Analysis of Vocabulary Repetition

江竜 珠緒 Tamao Eryu

明治大学附属明治高等学校中学校 (司書教諭) Meiji University Meiji High School & Meiji Junior High School (Teacher Librarian)

英語多読では学習用に編集されたGraded Readers (以下、GR)のほか、原書児童書を読むことが推奨されることがある。しかし、GRと原書児童書における語彙の特徴について明らかにしたものは少なく、原書児童書のシリーズを語彙学習に役立てることが可能なかという点については明らかになっていない。そこで本稿では、日本の高等学校での英語多読に用いられている原書児童書とGRの特徴を明らかにすることを目的として、それぞれの難易度および基本語との繰り返しや新出語の出現回数について、比較分析を行った。同一著者による原書児童書のシリーズでは、GRよりも高頻出語のカバー率が高くなるものがあり、同一シリーズ内の図書の難易度幅が小さいことが示された。したがって、語彙習得の方法の一つとして、英語多読においてGRだけでなく、Nate the Great Seriesのような難易度の低い原書児童書のシリーズを活用することの重要性が示唆された。

In extensive English reading programs, teachers use both graded readers (GR) and authentic children's books. However, little research has examined the characteristics of the vocabulary in them. The purpose of this study was to examine vocabulary repetition in GR and authentic children's book series used in extensive reading programs in Japanese high schools. This study analyzed GR and authentic children's books of approximately the same length, from Pearson English Readers and Oxford Bookworms Library for the former and the *Nate the Great* and *Magic Tree House* series for the latter. The analysis showed that although the authentic children's book series covered a greater number of high-frequency words than GR, they exhibited a narrower range of difficulty as well. These findings suggest that student vocabulary learning will benefit from reading not only graded readers but also authentic children's book series..

海外研究者による英語多読の原則では、学習者は辞書を引かずに読める平易なものを、できるだけ多く、学習者自身が選択して読むことが重要であるとされている (Day & Bamford, 1998; Day & Bamford, 2002; Nation & Waring, 2013; Prowse, 2002; Williams, 1986)。しかし教員自身もやさしい図書を読み、英語多読用図書に詳しくなるというような、従来の指導者の読書経験に依存した選書や学習者に対する図書選択指導は客観性に欠けるといえる課題がある。

そこで近年用いられている手法がコーパス分析である。コーパス分析とは、テキスト内に用いられた語彙を高頻度語リストと比較して、語彙難易度や頻度分布、文法の用法などの分析を行う手法である (石川ほか, 2020)。コーパス分析を用いた研究では、英語多読に用いられるGraded Readers (以下、GR) や原書の語彙を分析して、語彙難易度や語彙の繰り返しを明らかにしたものや、学習者に必要な語彙サイズを検討して、適切な英語多読用図書を示唆したものなどがある。その多くは学習用に編集されたGRの重要性を強調する結果となっている (Claridge, 2005; Hirsh & Nation, 1992; Webb & Macalister, 2013; Wodinsky & Nation, 1988)。しかしGRは成人を対象にして作られたものが多く、中学生や高校生を対象とした作品は多くないため、読み手をひきつける魅力的な物語で、かつ自然な英語が学べるものとして、やさしい原書児童書が推奨されることもある (古川ほか, 2005; Nuttall, 1982; 高瀬, 2010)。そのため、現在多くの日本の高等学校において、GRと原書児童書が英語多読用図書として併用されているが、語彙サイズの限られた高校生に原書児童書を用いることができるのかという点については、これまであまり研究がなされてこなかった。

そこで本稿では、日本の高等学校で英語多読に用いられている原書児童書のシリーズとGRの特徴を明らかにすることを目的とする。GRと原書児童書のシリーズの語彙難易度および語彙の定着が期待される基本語の繰り返しを調査する。そのために、日本で用いられている原書児童書のシリーズ、*Nate the Great Series* (以下、NTG) (Sharmat, 1977) と *Magic Tree House Series* (以下、MTH) (Osborne, 1992) の2シリーズと平均総語数が同程度のGRを選択した。本研究の成果として、英語多読に活用する図書についての基礎的な知見を提供できると考えられる。

### 先行研究

英語多読の指導においては、学習者のためにいろいろな図書を用意することが重視されている (Day & Bamford, 1998; Day & Bamford, 2002; Nation & Waring, 2013; Prowse, 2002; Williams, 1986)。英語多読では学習者が困難を感じることなく読み進められる難易度の図書を多く読むことが必要とされているため、このときに準備する図書は、学習者にとって既知語で95~98%カバーされた図書であることが望ましいとされることもある (Hu & Nation, 2000; Laufer, 1989)。

しかし、日本の外国語学部の大学生の語彙サイズでさえ2,000語程度とされることがある (与野覇・阿部, 2012)。高校生の語彙サイズはさらに低いものと推察される。そのため、日本の高等学校で用いられているGRや原書児童書

の中で、高校生にとってカバー率98%となる図書は少ないものと考えられるが、高校生が楽しんで読むことのできる難易度の原書児童書について検討された先行研究は見られない。

原書児童書の語彙難易度がどの程度統制されているのか、語彙の繰り返しがどの程度あるのかという点について、GRとの相違を比較検討した研究は少ない(Webb & Macalister, 2013)。また、Nation(2001)は、連続ものの物語では同じ語彙が繰り返される傾向にあるため、繰り返しに関する連続ものの物語の効果についてもっと研究がなされるべきと述べている。しかし、これまで日本の英語多読で使用されている原書児童書、特にシリーズとなっている図書を個別に分析したものはない。加えて、GRや Leveled Readers(以下、LR)の難易度を調査した先行研究においては、学習者の語彙レベルから、GRや原書など種類の異なる図書を1冊ずつ、3冊のみの調査を行っていたり(Hirsh & Nation, 1992; Wodinsky & Nation, 1988)、大学独自レベル内の異なる作家や出版社による複数図書の平均総語数や異なり語数、特徴的な語彙から、レベルや種類の難易度が検討されている(加野, 2016)。あるGRの下位レベルの語彙が上位レベルにどれだけ含まれているかということが、複数冊の図書内における使用語彙によって調査されることもある(Nation & Wang, 1999)。しかし、現実の英語多読においては、学習者は1冊ずつの図書を手に取って読み進めていくことになる。そのため、複数冊の合計ではなく、ある種類、あるレベルの図書を1冊ずつ読み進めたときの難易度や新出語の出現についての分析を行うことが、より学習者の実態に近い難易度を推察することになると考えられる。

なお、英語多読において、使用している語彙を数える用語としての総語数(延べ語数)は出現した語をそのまま数えるもので、異なり語数は同じ単語が2回以上繰り返し出現する場合、それを異なる語として数えるものである。また、見出し語数(Head Words:HW)はGRにおいて、各レベルの難易度を示すために使用している異なり語数を示したものである。ただし、各出版社が用いている語の数え方がレマであるのかワードファミリーであるのかは明らかにされていない。なお、レマは屈折形、短縮形からなるもので、ワードファミリーは-ly, -ness, un-などの派生語を含んだもののことである(Nation, 2001)。

## リサーチ・クエスチョン

日本の高等学校で英語多読に用いられている原書児童書のシリーズの特徴を明らかにするためには、高校生が習得済みであると推測される高頻出語がテキスト内にどれだけ出現しているのかというカバー率を調査する必要がある。本研究では調査に用いる語彙リストとして大学英語教育学会基本語改訂委員会編(2003)の『大学英語教育学会基本語リスト(JACET8000)』を用いて分析を行う。海外の研究ではWest(1953)のA General Service List(以下、GSL)を用いたコーパス分析が行われることが多いが、GSLではなくJACET8000を用いたのは、日本で英語を学ぶ高校生にとって読みやすい図書かどうかという判断を行うには、日本人英語学習者のために作成されたJACET8000のほうが適切であると考えたからである。表1に示したとおり、JACET8000は1,000語単位、8段階で難易度が分類されている(相澤ほか, 2005)。高等学校入学時には1,000語程度を習得していること、高等学校1年次から3年次にかけて、3,000語から4,000語程度を習得することが基本的な目安になると考えられる。つま

り、JACET8000中の基本1,000語のカバー率が高ければ高等学校入学時においても理解が容易な図書であると推察される。以下、JACET8000の語を「基本語」とする。

また、同一シリーズであれば自分に適切だと感じられる難易度の図書と出会う確率が高くなるのか、同一シリーズ内であっても、自分に適切だと感じられる図書と出会うばかりではなく、難しいと感じる図書と出会う危険性があるのかを明らかにするために、シリーズ内における1冊ずつの難易度の差異を標準偏差として調査する。

そこで、下記のリサーチ・クエスチョンを設定した。

- RQ1: 平均総語数が同程度の原書児童書のシリーズとGRでは、基本語のカバー率、標準偏差にどれくらい差異があるのか。
- RQ2: 平均総語数が同程度の原書児童書のシリーズとGRでは、新出語の出現数にどの程度の差異があるのか。
- RQ3: 原書児童書とGRに出現する語彙にはどのような相違がみられるか。

表1.  
JACET8000目安表

語数	目安
1~1,000	中学校英語教科書
1,001~2,000	高校初級/英字新聞の75%カバー/英検準2級合格に必要な
2,001~3,000	高等学校英語教科書/大学入試センター試験
3,001~4,000	大学受験, 大学一般教養初級
4,001~5,000	難関大学受験, 大学一般教養
5,001~6,000	英語専門外の大学生やビジネスマン/英検準1級合格に必要な
6,001~7,000	英語専攻の大学生やビジネスマン
7,001~8,000	日本人英語学習者の一般的な単語学習の最終到達目標

## 調査 対象図書

調査対象図書として選択したのは、原書児童書であるNTG、MTHと、それぞれと同程度の総語数であるGRのPearson English Readers Level 1(以下、PER1)とOxford Bookworms Library Stage 1(以下、OXB1)である。

NTGとMTHは日本の英語多読で推奨されることの多い原書児童書のシリーズで、NTGは現在29巻が発刊されており、MTHの基本シリーズは4冊1話完結の28巻で構成されている。

これら2種類の原書児童書と同程度の総語数をもつ原書児童書のシリーズとして選択したのは、英語多読における代表的なGRであるPER1とOXB1である。PER1はHW300語、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)(Council of Europe, n.d.)ではA1レベル(Pearson, n.d.)である。OXB1はHW400語、CEFRではA1/A2レベル

(Oxford University Press, n.d.)である。GRは学習用に編集されているため、今回は出版社の差異は不問とし、同一出版社で統一することはしなかった。MTH28巻に合わせて、NTGは29巻中28巻まで、GRもMTHと同様の28冊をランダムに選択した。

### 調査手続き

調査においてはPDF化した本文をテキスト化したものを使用した。目視による誤認識の有無確認も行っている。「英文語彙難易度解析プログラム(Word Level Checker:WLC)」(染谷, 2006)を使用して、語彙の難易度と語彙リストを抽出した。WLCではテキスト中のすべての語が自動的にレマ化され、JACET8000の1,000ごとにタグ付けされて分類される。Laufer (1989)やHu & Nation(2000)の研究では、ワードファミリー数によるカバー率が調査されている。しかし、ワードファミリー数では異なる品詞の語を1語とする。大学生でさえ派生形を作る基本的な接辞の知識が必ずしもあるわけではないともいわれている(Mochizuki & Aizawa, 2000)。日本の高校生にとっては、レマ化された語のカバー率を測定することのほうが、より実態に即しているものと考えられる。WLCでは高頻度の基本語以外の語はUnknown語になり、人名、地名、曜日、数詞などが含まれている。本研究においてはそれを「リスト外」として示した。

### 調査の結果

#### 原書児童書のシリーズとGRのカバー率、標準偏差

表2に各図書の平均総語数、平均基本語数、平均異なり語数を示した。原書児童書シリーズであるNTGの平均総語数は2,258語で、平均基本語数は335語、平均異なり語数は386語であった。MTHの平均総語数は5,698語で、平均基本語数は718語、平均異なり語数は846語であった。また、GRであるPER1の平均総語数は2,518語で、平均基本語数は230語、平均異なり語数は290語であった。OXB1の平均総語数は5,722語で、平均基本語数は401語、平均異なり語数は484語であった。

表2.

各図書の平均総語数、平均基本語数、平均異なり語数

	NTG	PER1	MTH	OXB1
平均総語数	2,258語	2,518語	5,698語	5,722語
平均基本語数	335語	230語	718語	401語
平均異なり語数	386語	290語	846語	484語

表3はNTGとPER1の基本語のカバー率と標準偏差を示したものである。基本1,000語(中学校英語教科書)ではPER1よりもNTGのカバー率のほうが低いが、基本2,000語(高校初級)以降では、NTGのカバー率のほうが大きいことが示された。NTG、PER1ともに90%以上のカバー率になることはなかった。標準偏差はPER1よりもNTGのほうが小さかった。PER1はリスト外の語(固有名詞、数詞など)の割合が高く、NTGの1.6倍程度あることが示された。

表3.

NTG、PER1のカバー率と標準偏差(28冊)

JACET 8000	NTG		PER1	
	カバー率	標準偏差	カバー率	標準偏差
1,000	66.29	3.65	69.19	5.50
2,000	77.02	3.21	75.25	5.99
3,000	81.42	2.67	77.30	5.75
4,000	82.25	2.59	77.87	5.86
5,000	83.89	2.28	78.32	5.88
6,000	85.21	2.19	78.65	5.82
7,000	86.05	2.16	78.97	5.81
8,000	86.87	1.95	79.20	5.75
リスト外	13.13	0.01	20.80	0.01

表4はMTHとOXB1の基本語のカバー率と標準偏差を示したものである。MTHのカバー率が低く、基本1,000語レベルでは52.21%のカバー率しかないことが示された。ただし、基本6,000語(英語専攻の大学生やビジネスマン)以降では、MTHのカバー率のほうが大きいことが示された。MTH、OXB1ともに90%以上のカバー率になることはなかった。標準偏差はOXB1よりもMTHのほうが小さかった。

表4.

MTH、OXB1のカバー率と標準偏差(28冊)

JACET 8000	MTH		OXB1	
	カバー率	標準偏差	カバー率	標準偏差
1,000	52.21	2.13	68.07	4.13
2,000	66.64	2.17	77.11	3.68
3,000	74.21	2.00	80.16	3.64
4,000	75.69	2.03	80.71	3.64
5,000	78.82	1.99	81.68	3.62
6,000	81.54	1.85	82.14	3.58
7,000	83.20	1.68	82.68	3.49
8,000	84.92	1.60	83.03	3.47
リスト外	15.08	0.01	16.97	0.01

#### 原書児童書のシリーズとGRにおける新出語の出現数

図1はNTGとPER1の新出語数の出現推移を示したものである。NTG1巻の基本語数は275語で、2巻目以降はそれ以前の巻に出現した語を除外したものを新出語とすると、2巻目は121語、3巻目は78語で、4巻目以降は25冊中18冊が50語以下の出現となっていた。全28冊に出現した総基本語数は1,533語、出現回数中央値は5回であった。PER1の1冊目の基本語数は189語、2冊目は76語、3冊目は68語で、4冊目以降は25冊中24冊が50語以下、うち

16冊が20語以下の出現となっていた。28冊に出現した総基本語数は861語、出現回数の中央値は13回であった。

図1.

NTGとPER1

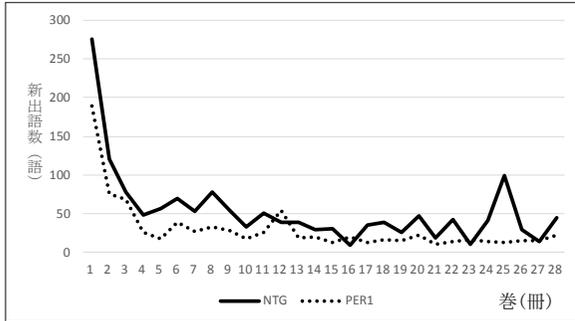
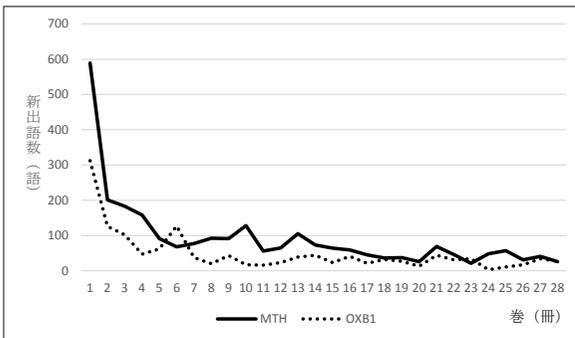


図2は、MTHとOXB1の新出語数の出現推移を示したものである。MTH1巻目の基本語数は589語、2巻目は201語で、4巻目でも158語と150語以上の新出語のあることが示された。5巻目以降は24冊中10冊が50語以下の出現となっていた。全28冊に出現した総基本語数は2,651語、出現回数の中央値は6回であった。

OXB1の1冊目の基本語数は312語、2冊目は126語、3冊目は102語で、4冊目以降は25冊中23冊が50語以下の出現となっていた。20語以下の出現の図書が6冊あった。28冊に出現した総基本語数は1,357語、出現回数の中央値は13回であった。

図2.

MTHとOXB1の新出語の出現推移



MTHとGR、NTGとの語彙の重複

図2で示したように、MTH1巻の基本語数は589語で、NTGの275語、PER1の189語、OXB1の312語の1.9倍から3.1倍であった。

表5はNTG、PER1、OXB1のそれぞれの中に含まれる基本語とMTH1巻の基本語における重複を示したものである。NTG内の基本語はMTH1巻の中に500語(84.89%)、PER1内の基本語は303語(51.44%)、OXB1内の基本語は435語(73.85%)出現していた。NTG内の基本語がもつ

とも多く出現していることが示された。

表5.

NTG、PER1、OXB1基本語とMTH1巻基本語との重複

	NTG	PER1	OXB1
有	500(84.89%)	303(51.44%)	435(73.85%)
無	89(15.11%)	286(48.56%)	154(26.15%)

図3は、PER1、OXB1にはないが、NTGには10回以上出現していたMTH1巻内の基本語である。かつこ内にはNTGでの出現回数を示した。原書児童書であるからこそ使用されたと思われる(pet, crawl, shrug, yell, tiny)などの語のほか、文法が統制されているGRだからこそ使用されなかった(should, might, toward, almost, instead)などの語がNTGに特徴的な語として示された。

図3.

NTGに特徴的な語

should (50)、rush (48)、bite (36)、pet (34)、might (29)、shiny (23)、base (21)、toward (20)、crawl (19)、plain (17)、stuff (17)、notice (16)、trip (16)、dry (15)、information (14)、pack (14)、porch (14)、almost (13)、peer (13)、shrug (13)、yell (13)、lead (12)、search (12)、straight (11)、grass (10)、instead (10)、tiny (10)

考察

本稿では、日本の高等学校で英語多読に用いられている原書児童書のシリーズとGRの特徴を明らかにすることを目的として、それぞれの語彙難易度および語彙の定着が期待される基本語との繰り返しを調査した。

GRと原書児童書の難易度差

RQ1の平均総語数が同程度の原書児童書のシリーズとGRでは、基本語のカバー率、標準偏差にどれくらい差異があるのかという点については、表3で示したように、NTGの基本2,000語のカバー率は、PER1よりも高かった。95~98%のカバー率には到達しないが、77.02%の既知語で読むことができるということは、高校生にとってはかなり容易に読めるレベルであることが推察される。標準偏差はPER1よりも小さいため、高校生が継続してNTGを読むことは、難易度差のある図書を選択を避けることになると考えられる。一方、PER1は標準偏差が大きいため、PER1内のある1冊のレベルが適切だと感じられたとしても、他の1冊のレベルが高校生にとって難易度の高い図書となる危険がある。なお、表4で示したようにMTHとOXB1においても、MTHの標準偏差のほうが小さかった。

これまでの先行研究においては、学習者が難しすぎる図書を選択する危険性が少なく、高頻出語の使用率が高いことから、英語多読において原書児童書ではなくGRを用いることが推奨されてきた。平均基本語数を見出し語と考えると、NTG(平均基本語数335語)はPER1(HW300語)と同程度、MTH(平均基本語数718語)はOXB1(HW400語)ではなく、OXB2(HW700語)に相当する難易度になる

ということが示された。総語数が同程度の原書児童書とGRとでは、レベルとして1段階以上の差異が生じる可能性のあることが示唆された。しかし本調査によって、同一著者による原書児童書のシリーズでは、GRよりも高頻出語のカバー率が高くなるものがあること、同一シリーズ内の図書を選択することで、GRよりも難易度が近似した図書と出会えることが示されたことには意義があると考えられる。

ただし、PER1の標準偏差が大きいことには、表3で示したようにリスト外の語が多いことにも理由がある。調査対象図書の中から人名や地名などの固有名詞が多く使用されている伝記を除外して、物語のみを原書児童書のシリーズと比較することが今後の課題として考えられる。

### GRと原書児童書における語彙の繰り返し

RQ2の平均総語数が同程度の原書児童書のシリーズとGRでは、新出語の出現割合の差異がどの程度あるのかという点については、GRのほうが語彙の繰り返しが多いことが示された。これまでの先行研究においては、GRの低位レベルの語彙が上位レベルにどれだけ含まれているかということが、複数冊の図書内における使用語彙によって調査されていた。本調査では、高校生が実際に1冊ずつ読み進めたときに会う新出語数の推移を調査した。図1、図2で示したように、原書児童書も同一シリーズを読むことで、GR同様に4冊目あるいは5冊目で未知語との出会いが減少することが示された。

ただし、GRと原書児童書のシリーズでは、GRのほうが28冊に出現する総基本語数が少なく、出現回数の中央値は13回で、原書児童書のシリーズの倍以上あった。同じ語彙との繰り返しの出会いを重視するのであれば、GRが適切であることが確認された。

### 原書児童書の語彙の特徴

RQ3の原書児童書のシリーズ語彙の特徴としては、総語数、難易度の異なる原書児童書のシリーズ同士のほうが、同程度の総語数のGRより共通して登場する語彙が多いことが示された。

図2で示したように、MTH1巻目の基本語数は589語で、GRや難易度の低い原書児童書であるNTGの1.9倍から3.1倍あることが示された。しかし、基本1,000語のカバー率が高いPER1やNTGを読んだときに習得した基本語がMTHに登場しているのであれば、MTHを読み進めることが比較的容易になることが推察される。表5で示したように、NTG28巻を読了していれば、MTH1巻で会う基本語は89語まで減少させることができる。これは、原書児童書にはGRには出現しない特徴的な語が使用されているからである。

これらのことから、GRであるPER1と同時に、同程度の難易度で読むことができるNTGを準備することは、高校生が難易度の近似した図書と出会い、高頻出語と出会えること、より難易度の高い原書児童書を読むための幅広い語彙の習得を可能にすることになると考えられる。英語科教諭には、習得できる語彙の相違点を理解した上で、GRだけではなく原書児童書のシリーズを活用することが期待される。

### 本研究の限界

本研究では、PERとOXBという違う出版社のGRを選択したが、PER1には伝記が含まれていたため、リスト外の語が多くなるという結果となった。同一出版社のGRを用いた調査や、物語のみに限定した調査を行うことが今後の課題として考えられる。また、今回はJACET8000に準じての調査を行った。しかし、今後は実際の高校生の習得語彙サイズから、どの程度の理解度で読めるのかという分析を行うために、中学校英語教科書コーパスとの比較や、高校生の語彙サイズ調査を行った上での調査の実施も必要になると考えられる。

### 結論

本稿では、日本の高等学校で英語多読に用いられている原書児童書のシリーズとGRの特徴を明らかにすることを目的として、それぞれの難易度および語彙の定着が期待される基本語との繰り返しを調査した。

平均総語数が同程度の原書児童書とGRとでは、レベルとして1段階以上の差異が生じることが示唆された。これまでの先行研究においては学習者が難しすぎる図書と出会う危険性が少なく、高頻出語の使用率が高いことから、英語多読においては原書児童書ではなくGRを用いることが推奨されてきた。しかし、本調査によって同一著者による原書児童書のシリーズでは、GRよりも高頻出語のカバー率が高くなるものがあること、同一シリーズ内の図書ではGRよりも難易度の差異が少ないことが示された。

シリーズ内の図書を1冊ずつ読み進めたときに会う新出語数の差異については、GRのほうが語彙の繰り返しが多く、新出語が少ないことが示された。ただし、原書児童書も同一シリーズを読むことで、GR同様に4冊目あるいは5冊目で未知語との出会いが減少していた。

本調査によって、NTGはPER1と同程度の難易度であるが、GRよりも幅広い基本語との出会いがあることが示された。英語多読の指導においてPER1と同程度の難易度で読むことができるNTGを準備することは、高校生が難易度の近似した図書と出会い、高頻出語と出会えること、より難易度の高い原書児童書を読むための幅広い語彙の習得を可能にすると考えられる。英語科教諭には、習得できる語彙の相違点を理解した上で、GRだけではなく原書児童書のシリーズを活用することが期待される。

### 謝辞

本稿をまとめるにあたっては、筑波大学図書館情報メディア系逸村裕教授と鈴木佳苗教授にご指導とご助言をいただきました。御礼申し上げます。

### 引用文献(日本語)

- 相澤一美・石川慎一郎・村田年ほか編(2005)『JACET8000英単語:「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく』桐原書店。
- 石川慎一郎・長谷部陽一郎・住吉誠(2020)『コーパス研究の展望』開拓社。
- 加野まきみ(2016)『多読学習用リーダー・コーパス構築と分析:学習者が感じる「難しさ」の解明へ向けて』「京都産業大学論集.人文科学系列」49,183-200。

- 染谷泰正 (2006) 「Word Level Checker: 英文語彙難易度解析プログラム」Aoyama Gakuin University. [http://someya-net.com/wlc/index\\_J.html](http://someya-net.com/wlc/index_J.html).
- 大学英語教育学会基本語改訂委員会編 (2003) 『大学英語教育学会基本語リストJACET8000: List of 8000 Basic Words』大学英語教育学会.
- 高瀬敦子 (2010) 『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店.
- 古川昭夫・神田みなみ・小松和恵・畑中貴美・西澤一 (2005) 『英語多読完全ブックガイド: めざせ1000万語!』コスモピア.
- 与那覇信恵・阿佐宏一郎 (2012) 『英語カリキュラムに連動した語彙教材開発のための基礎調査: Reading教科書の語彙分析』「文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要」(11), 69–82.
- 引用文献 (英語)**
- Council of Europe. (n.d.). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. <https://rm.coe.int/common-european-framework-of-reference-for-languages-learning-teaching/16809ea0d4>
- Claridge, G. (2005). Simplification in graded readers: Measuring the authenticity of graded text. *Reading in a Foreign Language, 17*(2), 44–158.
- Day, R. R., & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge University Press.
- Day, R. R., & Bamford, J. (2002). Top ten principles for teaching extensive reading. *Reading in a Foreign Language, 14*(2), 136–141.
- Hirsh, D., & Nation, P. (1992). What vocabulary size is needed to read unsimplified texts for pleasure? *Reading in a Foreign Language, 8*(2), 689–696.
- Hu, M., & Nation, I. S. P. (2000). Vocabulary density and reading comprehension. *Reading in a Foreign Language, 13*(1), 403–430.
- Laufer, B. (1989). What percentage of text lexis is essential for comprehension? In C. Lauren & M. Nordman (Eds.), *Special language: From humans thinking to thinking machines* (pp. 316–323). Multilingual Matters.
- Mochizuki, M., & Aizawa, K. (2000). An affix acquisition order for EFL learners: An exploratory study. *System, 28*(2), 291–304.
- Nation, I. S. P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge University Press.
- Nation, P., & Wang, M. K. (1999). Graded readers and vocabulary. *Reading in a Foreign Language, 2*(2), 355–380.
- Nation, P., & Waring, R. (2013). *Extensive reading and graded readers*. Reading Oceans. [http://www.readingoceans.jp/ComData/files/Paul%20Nation%20%20Rob%20Waring's%20ER%20Booklet\\_eng.pdf](http://www.readingoceans.jp/ComData/files/Paul%20Nation%20%20Rob%20Waring's%20ER%20Booklet_eng.pdf)
- Nuttall, C. (1982). *Teaching reading skills in a foreign language*. Heinemann Education Books.
- Osborne, M. P. (1992). *Dinosaurs before dark*. Random House Books for Young Readers.
- Oxford University Press. (n.d.). *Oxford bookworms library*. <https://www.oupjapan.co.jp/ja/gradedreaders/bookworms.shtml>
- Pearson. (n.d.). *Pearson graded readers*. <https://www.pearson.co.jp/catalog/pearsons-graded-readers>
- Prowse, P. (2002). Top ten principles for teaching extensive reading: A response. *Reading in a Foreign Language, 14*(2), 142–145.
- Sharmat, M. W. (1977) *Nate the great*. First Yearling.
- Webb, S., & Macalister, J. (2013). Is text written for children useful for L2 extensive reading? *TESOL Quarterly, 47*(2), 300–322. <https://doi.org/10.1002/tesq.70>
- West, M. A. (1953). *General service list of English words: With semantic frequencies and a supplementary word-list for the writing of popular science and technology*. Longman.
- Williams, R. (1986). Top ten principles for teaching reading. *ELT Journal, 40*(1), 42–45.
- Wodinsky, M., & Nation, P. (1988). Learning from graded readers. *Reading in a Foreign Language, 5*(1), 155–161.

江竜珠緒は筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士前期課程を修了し、2007年から明治大学付属明治高等学校中学校の司書教諭として勤務している。研究テーマは司書教諭と教科教諭との連携、学校図書館による生徒および教科教諭支援である。現在は主に英語多読について研究を行い、その成果を日々の実践に生かしている。彼女の著作は『学校図書館員と英語教科教諭のための英語多読実践ガイド』(江竜珠緒&村松敦子、2018)である。



**Tamao Eryu** has worked as a teacher librarian at Meiji University Meiji High School & Meiji Junior High School in Tokyo since 2007. She received her master's degree from the Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba. Her research focuses on Teacher-Teacher Librarian Collaboration and student and teacher support. She is currently investigating extensive reading programs. Her publications include *A Guidebook for School Librarians and English Teachers* (in Japanese, 2018, with K. Muramatsu).



JALT2022 – Learning from Students,  
Educating Teachers: Research and Practice  
Fukuoka • Friday, Nov. 11 to Monday, Nov. 14 2022